

形容詞の連体、連用、終止用法の 出現頻度と意味との関連性をめぐって — 「高い」「広い」「寂しい」を例として —

丹 保 健 一

On the Sense and Frequency of the Threetypes Adjectival Usage
with Special Reference to Japanese takai, hiroi and sabisii

Ken-ichi TANBO

キーワード：形容詞、語義、語形、用法、高い、広い、寂しい

要旨：活用・用法の出現頻度は、語義（下位区分されたものを含む）の性格によるところが大きいことを、「高い」「広い」「寂しい」の用例を見ることによって示した。

0. はじめに（問題の所在）

宮島（1992）は、『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L（Basic Adjectives）辞書編・解説編』が、「終止・連体・連用の各用法のすべてが形容詞に見られるわけではない」ことを基本的形容詞の全体にわたって具体的に指摘したことを高く評価している。そして自らも、「現代雑誌九十種の用字用語五十音順語彙表・採集カード」によって、用法の出現頻度にかたよりのあることを報告している。その中に、つぎのような指摘が見られる。

「一般に、基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がって、終止や連用の比率がたかくなる傾向がある。つぎの例を見ていただきたい。

あたたかい (5)	「～いごはん」	. 90	→	あたたかい (7)	「～い思いやり」	. 62	
こまかい (1)	「～い粒」	. 56	→	こまかい (4)	「～い注意」	. 45	
たかい (2)	「～い位置」	. 72	→	たかい (3)	「～い温度」	. 57	
				→	たかい (4)	「～い関心」	. 26
				→	たかい (6)	「～い音」	. 47
つめたい (2)	「～い水」	. 91	→	つめたい (6)	「～い対応」	. 71	
ひろい (1)	「～い川」	. 77	→	ひろい (2)	「～い知識」	. 50	
ふかい (1)	「～い湖」	. 69	→	ふかい (6)	「～い理解」	. 62	

本稿では、宮島の言う「一般に、基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がって、終止や連用の比率が高くなる傾向がある」ことの内実について、実際の用例によって考えてみたい。

1. 用例について

1-1. 対象語彙

調査語彙は、例として挙げられている「高い」「広い」をとりあげることにした。

宮島が例として挙げている形容詞「あたたかい」「こまかい」「つめたい」「ふかい」を対象としなかったのは、データから十分な用例を採集できなかったからである。また「深い」のように用例が多くても、語義区分数が多く各下位語義の用例が少ないと思われるものものぞいた。

又、「高い」「広い」とは異なる性質を持ち、感情形容詞と呼ばれている「寂しい」も対象とした。感情形容詞の中で「寂しい」を取り上げたのは、用例数が多かったからである。

1-2. 用例採集資料

用例は、小学校1社(12冊)中学校2社(6冊)、高等学校2社(20冊)の計38冊の国語教科書(フロッピー・本文フロッピー)から採集した。同一の出典による用例は除いた。各教科書名は用例出典一覧を参照されたい。

1-2. 用例採集方法

用例の採集に当たっては、JPERLを基本にSED、CGREPを組み込んで作成した簡単な検索スクリプトによっている。このスクリプトは、いくつかの形容詞を一挙に検索し、かつ文脈つきで出力するものである。JPERL、SED、CGREPは、いずれも信頼性の高いプログラム言語及びフィルターである。

1-3. 用法

用法を次のように分けて考えていきたい。

タイプT：体言修飾用法(以下「体修」と略称することがある)

- (1) 形容詞+名詞1(以下、「AD+N1」と表す)
- (2) 名詞2+形容詞+名詞1(以下、「N2+AD+N1」と表す)

注：N2が「」内にあるのは、N2がないと不自然になることを意味している。

タイプY：用言修飾用法(以下「用修」と略称することがある)

- (1) 形容詞+動詞/形容詞/形容動詞(以下、「AD+V/AD/AV」と表す)「/」は「又は」を意味する。

タイプS：終止用法(以下「終止」と略称することがある)

- (1) 形容詞+(終助詞/感投助詞)+。(以下、「AD+。」と表す。()は、省略可を意味している。)

タイプH：その他の用法(以下「他法」と略称することがある)

次のような語形は、宮島(1992)にならい、体言修飾用法、用言修飾用法、終止用法に含めなかった。本稿では「その他の用法」とした。

「-くなる」、「-くする」、中止用法の「-く」、「-いこと」「-いとき」などの形式的連体、「-いなら」「-いので」「-いから」の類、等

なお、その他の用法として分類した語形は、各語の分析に先立ってすべて示した。

2. 「たかい」の語義区分と語形と用法

2-1. 「たかい」の語義区分

語義区分にあたっては、橋本、青山(1992)、宮島(1992)が用いている『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL (Basic Adjectives)』(以下『IPALA』と略称する)と、小型辞書(ただし収録語数6万語台)の中ではもっとも語義区分が細かいと思われる『学研現代新国語辞典』(以下『学現』と略称する)を参照しつつ、本稿の目的にそった区分を考えた。「広い」「寂しい」も同様に行った。

『IPALA』語義区分数：6

- (1) 下端から上端までの距離が大きい。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 空間的広がり; 量; 高低, (文例) 太郎の背は高い。
- (2) 比較的上の方に位置する。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 空間的広がり; 量; 高低, (文例) この山の展望台の位置は高い。
- (3) 数量的な程度が普通より上である。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 程度, (文例) この実験の成功の確率は高い。
- (4) 程度が普通より上である。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 程度, (文例) あの先生の教養は高い。
- (5) 音や声などの音程が普通より上である。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 生理・刺激; 聴覚・音, (文例) あの人の声は高いから、ソプラノがいい。
- (6) かかる金額が大きい。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 価格, (文例) この店の食料品の値段は高い。

『学現』語義区分数：11

- (1) (ものの位置が) 上の方であって、基準の面(地面・海面・底面など)からのへだたりが大きい。
- (2) (ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。
- (3) 身分・地位が他より上にある。
- (4) 能力が他よりすぐれている。
- (5) 品位・品格がりっぱである。
- (6) 一定の水準よりまさっている。
- (7) 程度・勢いなどがはげしい。また、数値が大きい。
- (8) 声・音が耳に大きく聞こえる。
- (9) よく聞こえている。有名である。
- (10) 買うのに多額の金銭がかかる。量や質にくらべて値段が多い。
- (11) えらぶっている。[多く「おーい」の形で使う]

『IPALA』『学現』には上のように記されているが煩雑である。本稿の主旨からすれば次のように区分することで十分である。

- ①空間的な位置が上だ。
- ②抽象的な位置が上だ。

- ③音、香りが強い。
- ④有名である。
- ⑤多額の金銭がかかる。
- ⑥えらぶっている。
- ⑦その他

上記の分類は、『IPALA』『学現』の(1)(2)をまとめて①、『学現』の(3)(4)(5)(6)(7)『IPALA』の(3)(4)をまとめて②、『IPALA』の(5)、『学現』の(8)を、「香りに関する強さ」をも含め③、『学現』の(9)を④、『IPALA』の(6)、『学現』の(10)を⑤、『学現』の(11)を⑥と各々分類したものである。

2-2. 対象とする語形について

扱う語形は、「高[いかくけう]」の形式を持つものである。[]は、その中に含まれるいずれかの一文字を指す。つまり、「高」の後に「いかくけう」のいずれかが承接する場合を対象とする。古文はもとより対象としない。

「高[いかくけう]」という語形を含む例でありながら対象としなかったものを示しておく。()内の数字は出現回数を示している。

「甲高い／く」(14)、「空高く」(4)、「高い高い」(注：子供を高く持ち上げて発する言葉)(1)、「小高い」(1)、「天高く」(1)、「物見高い」(2)、「うず高い」(2)、「気高い」(2)、「名高い」(3)、「誇高い」(1)、「音高く」(2)、「軒高く」(2)、「丈高く」(2)、「格調高い」(1)

上に挙げた外、教科書に用例として挙げられているものも対象としなかった。

2-3. 体修、連修、終止に含めなかった用法について

体修、連修、終止に含めなかった用法、つまり「その他の用法」とした例を意味(区分)番号を添えて示しておく。

表 1

語 形	語義番号(注)	語 形	語義番号(注)
-いのだ	2	-くなくて	1
-くない	1	-くなくて	1
-くない	1	-くなくて	1
-いこと	2	-くし	1
-いこと	2	-い「鼻が高い」	7(慣用句)
-いんだろう	5	-く、	2(中止法)
-いこと	2	-くし、	1
-くなくて	2	-く、	3(並立)
-くはない	2	-くない、	1
-い中(うち)に	1	-くなった	1
-い、	1	-くなる	4
-くなる	2	-く、	2(中止法)
-くなくて	1	-かったわ	1
-いから	1	-いが、	1
-くなくて	1	-いといって	1
-いわりには	5	-からしめた	4
-いため	2	-く、	1(並立)
-く、	2(並立)	-くなくて	3
-くして	3	-くならない	5
-くして	3	-くした	1
-くて	3	-くして	1
-く、	2(中止法)	-くなくて	1
-くなくて	5	-くして	1
-くなくて	1		

2-4. 「たかい」の語義区分と用法

2-1で示した語義の下位区分によって用例出現数を表したのが次の表である。

()内の少数点は、「体修」(「-い」)「用修」(「-く」)「終止」(「-い」)の中における、各々の割合を示している。

表2

	「体修」	「用修」	「終止」	「他法」	計
①空間的な位置が上だ。	63 (0.677)	29 (0.312)	1 (0.011)	23	116
②抽象的な位置が上だ。	24 (0.774)	2 (0.065)	5 (0.161)	12	43
③音、香りが強い。	4	2	1	5	12
④有名である。	0	0	0	1	1
⑤多額の金銭がかかる。	3	1	1	4	9
⑥えらぶっている。	0	1	0	0	1
⑦その他	0	0	0	1	1
計	94	35	8	46	183

表2をみると、第1義の体修、用修、終止の割合が、67.7%、31.2%、10%、そして第2義の割合が77.4%、6.4%、16.1%である。必ずしも、「基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がって、終止や連用の比率がたかくなる傾向がある」とは言えないように思われる。(なお、第3義以降については数が少ないのでここでは触れない。)

「用修」の割合が、第2義より第1義に大きいことと、第1義の「終止」の割合が極端に少ないことの二点を中心に見ていきたい。

具体的に、第1義と第2義の用例を見ると、第1義は、「澄む」(注：基本形・終止形で示す。以下同じ)「上がる」「あがる」(2)(注：かっこ内の数字は重複出現回数を示す。以下同じ)、「まい上がる」、「はね上がる」、「見える」、「昇る」、「投げ上げる」、「昇る」(5)、「生い茂る」、「跳べる」(4)「跳ぶ」(2)、「差し伸べ」、「飛び去る」、「飛ぶ」、「突き出す」、「上げる」、「三周する」、「天翔ける」、「さしあげる」、「そびえる」といった語を修飾している。これに対して、第2義は、「評価される」「燃える」の2語のみである。しかも、「燃える」の例は、比喩的な表現である。被修飾語を見てくると、「用修」において、第1義より第2義の割合が大きいのは、形容される「用言」の多様性と無関係ではない。つまり、出現率の高い用言が「高い」によって形容されることが可能であるということが言えよう。一方、第2義の連用修飾用法においては、「高い」によって形容されにくいことが要因と考えられる。

次に、終止用法の具体的な用例を見ると、第1義は、「背も高い。」の一例のみ、第2義は「頻度が高い。」「熱が高いわ。」「許容度も高い。」「可能性が高い。」「自由度が高い。」の5例である。

しかも、第1義の例は、次に示すように、一般的な判断文とは性格を異にする特殊な用法であり、頻出する用法とは言えないだろう。それに対し、第2義の終止用法は論説文などでよく見かけられるものである。

「もうだめだ……。これでめちゃくちゃだ。もうだめだ……。やめときゃよかった……。」肉の厚い掌で顔をごしごしこする。

やにわに小石をけりとばす。

Qはバレー部の主力選手で肩幅も広く、背も高い。わたしは彼のあごまでしかない。その彼が今、縮んで見える。Qは怖くてたまらないのだ。(あんな貧弱な子のために……)とわたしは思う。まるで野ねずみの友情を失うのを怖がっている象のようだ。

また、第1義について言えば、「あの高い木は…」「あの高い山は…」が、文脈フリーの状態であるのにたいして、「あの木は高い。」「あの山は高い。」は、限定された文脈を必要とする。既知の具体物の外形を「高い」によって断定表出する必要は、一般にはないからである。

3. 「広い」の語義区分と語形と用法

3-1. 「広い」の語義区分

「広い」の語義区分は、『IPALA』に従いたい。参考に『学現』の語義下位分類も挙げておく。

『IPALA』3

- (1) 幅や面積などが大きい。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 空間的広がり; 量; 広狭,
(文例) その道路の道幅は 広い。
- (2) 範囲が大きい。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 程度; 範囲, (文例) 彼の知識の範囲は 広い。
- (3) 見方・考え方が柔軟で、包容力がある。(意味分類1) 属性, (意味分類2) 程度, (文例) 太郎の心は 広い。

『学現』4

- ①面積が大きい。幅が大きい。
- ②大きくひらけている。
- ③行き届く範囲が大きい。
- ④こせこせせず、ゆったりしている。

3-2 対象とする語形について

扱ふ語形は、「広い[いかくけう]」「ひろ[いかくけう]」の語形を持つものである。

対象としなかった語形を示しておく。()内の数字は出現回数を示す。(なお、古文はもとより対象としていない)

「はば広い」(1)、「幅広い」(2)、「だだっ広い」(1)、「くりひろい」(1)、「おちばひろい」(1)、語例として使われているもの

なお、「広い広い」は一例としてあつかった。

3-3. 体修、連修、終止に含めなかった用法について

体修、連修、終止に含めなかった用法、つまり「その他の用法」とした例を意味(区分)番号を添えて示しておく。

表 3

語 形	語義番号 (注)	語 形	語義番号 (注)
－くて	1	－場合	1
－った	1	－ったら	1
－て	1	－った	1
－いまま	2	－くし	1
－くは	2	－く、	2 (中止法)
－った	1	－く、	1 (中止法)
－はない	1	－く、	1 (並立)
－のです	1	－くはない	1
		－ようだ	1

3-4. 「広い」の語義と用法

3-1で示した語義下位分類によって用例の頻度を表したのが次の表である。

()内の少数点は、「体修」「用修」「終止」内における割合を示している。

表 4

「IPALA」	「体修」	「用修」	「終止」	「他法」	計
①幅や面積などが大きい。	57 (0.877)	5 (0.077)	3 (0.046)	13	78
②範囲が大きい。	17 (0.370)	29 (0.630)	0 (0.000)	4	50
③見方・考え方が柔軟で、包容力がある。	0	0	0	0	0
計	74	34	3	17	138

表4を見ると、確かに「基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がって、終止や連用の比率がたかくなる傾向がある」と言えるようである。

先に見た「高い」と比べると、第1義に占める連用修飾用法の少なさが目に付く。逆に言えば、第1義にしめる体言修飾用法が多いとも言える。これは、広がりを持つ物が多いこと、言い換えればそれを表す名詞が多いことが大きく影響していると思われる。また、連用修飾が少ないのは、「広い」によって形容できる動作・動詞の少ないことと無関係ではあるまい。

4. 「寂しい」の語義区分と語形と用法

4-1. 「寂しい」の語義区分

『IPALA』語義区分数：3

- (1) (私は)心が満たされず、孤独であると感じている。(意味分類1)感情, (意味分類2)心理; 悲喜, (文例)私は なんとなくさびしかった。
- (2) 人を、孤独で心が満たされないような気持ちにさせる。(意味分類1)属性, (意味分類2)心理; 悲喜, (文例)あの音楽は さびしい。
- (3) 人の気配が少なく、ひっそりしている。(意味分類1)属性, (意味分類2)生理・刺激 + 陰気陽気, (文例)季節外れの行楽地はさびしい。

『学現』語義区分数：3

- (1) ほしいものが物が得られず、物足りない。
- (2) 心が満たされず、楽しい気分になれない。

- (3) ひっそりしていたり、数が少なかったり、内容がとぼしかったりして、心細い。にぎやかさがなく、気が滅入るようだ。

『IPALA』『学現』には上のように記されているが、『IPALA』の分類に③の意味「(期待にそわず)物足りない。残念だ。」を独立させ、次のように意味区分するのが妥当と思われる。

- ①(孤独で)心が満たされない。又はそれと類する気持ちである。
- ②①の気持ちを起こさせる様子である。
- ③(期待にそわず)物足りない。残念だ。
- ④活気がなく静かな様子である。
- ⑤慣用句的用法

しかし一方では、上記のように分類したとしても、②と④に関しては、文脈上での判別が困難であるといった問題が残る。そこで、本稿では、②と③とまとめ、最終的には次のような4分類にした。

- ①(孤独で)心が満たされない。又はそれと類する気持ちである。
- ②①の気持ちを起こさせる様子である。(「活気がなく静かな様子」を含む)
- ③(期待にそわず)物足りない。残念だ。
- ④その他

上のように分類しても、まだわかりにくい点が残るが、①は「人の心情・気持ちを表し」、②は「物・事の属性を表す」と考えたい。

4-2. 対象とする語形について

扱う語形は、「寂し[いかくけ]」「さびし[いかくけ]」「さびしゅう」の形式を持つものである。

対象としなかった語形を示しておく。()内の数字は出現回数を示す。(なお、古文はもとより対象としていない。)

「もの寂しい」(1)

又、「寂しい」という語形・文字そのもの指す場合、語例として使われている場合も対象としなかった。

4-3. 体修、連修、終止に含めなかった用法について

体修、連修、終止に含めなかった用法、つまり「その他の用法」とした例を意味(区分)番号を添えて示しておく。

次の例は、①とも②とも判断がつきにくいものである。どの分類にも数えていない。

「…崩れるのを見るに増して、この世を寂しく思わせるものはない。」

表 5

語 形	語義番号 (注)	語 形	語義番号 (注)
－いのである	3	－くなった	2
－いまま	1	－いもの	1
－いことも	2	－いんです	1
－いことだ	1	－くて	1
－いことは	1	－くなった	1
－かった	2	－かった。	1
－くは	1	－くなる。	1
－くて	1	－かった。	1
－く	1 (並立)		

4-4. 「寂しい」の語義と用法

4-1 で示した語義下位分類によって用例の頻度を表したのが次の表である。

() 内の少数点は、「体修」、「用修」、「終止」の中での、割合を示している。

表 6

「学新」	「体修」	「用修」	「終止」	「他法」	計
①孤独だ。心細い。	4 (0.667)	2 (0.333)	0 (0.000)	14	20
②①の気持ちにさせる様子だ。	11 (0.733)	2 (0.133)	2 (0.133)	3	17
③物足りない。残念だ。	0	0	2	1	3
④その他	0	0	0	0	0
	15	4	4	18	41

表6を見ると、あまりにも用例が少ないのであるが、「基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がって、終止や連用の比率がたかくなる傾向がある」とは、第1義と第2義を比較する限りでは言えないようである。

これは、元々第1義が時間的に限定された形容であるのに対して、第2義が時間的限定を伴わない形容であることからくるものと思われるが、例文の数が少ない。本格的な分析は、別の機会に譲りたい。

表6のなかでは、第3義の用法が目される。第3義においては、「体修」「用修」が1例も見られず、終止用法のみが見られる。体修用法はここでは、採集できなかったが、「寂しい数である。」(作例)のように可能性はある。しかし、「用修」は、作例さえも思いつかない。「残念なことに」+「用言」とでも表現するのであろう。

これは、第3義の「寂しい」が、事柄全体に対する評価を表すがゆえに、単独の「用言」を修飾しにくいのだと考えることができよう。ここにおいても語義の性格が、用法の出現に大きく関わっていることが言えそうである。

ちなみに、朝日新聞の「天声人語」(1985-1991年)には、「寂しい」3義の用例が14例見られるが、「体修」「用修」の例は一例も見られなかった。

5. おわりに

これまで見てきたように、用法・語形の出現頻度が語義(下位語義を含む)に大きく依存していることを、「高い」「広い」「寂しい」の用例によって示したきた。

宮島の言う、「一般に、基本的・具体的な意味よりも、派生的・抽象的な意味では、連体の比重が下がっ

て、終止や連用の比率がたかくなる傾向がある。」という指摘は、そのような傾向を生み出す形容詞の語義が多いと言うことになる。

用例採集資料の性格、語義区分の相違が、用法・語形の出現頻度に影響を及ぼすことも想像に難くない。

「その他の用法」については、詳しく触れられなかった。連体修飾構造の内、外の関係をも視野に入れた考察、各形容詞の潜在的共起力との関連をも考慮した考察などが、今後の課題として残されている。

<用例出典一覧> (いずれも、平成5~8年度用国語教科書)

光村図書発行小学校国語教科書 (フロッピー)

光村図書発行中学校国語教科書・本文フロッピー

三省堂出版発行中学校国語教科書・本文フロッピー

次の三省堂出版発行高等学校国語教科書・本文フロッピー

『新現代文』『現代文』『明解国語Ⅰ』『明解国語Ⅱ』『新国語Ⅰ』『新国語Ⅱ』『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』

次の東京書籍発行高等学校国語教科書・本文フロッピー

『新編国語Ⅰ』『新編国語Ⅱ』『新編現代文』『現代文』『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』

『新編国語』『現代文』『明解国語Ⅰ』『明解国語Ⅱ』『新編国語Ⅰ』『新編国語Ⅱ』

朝日新聞天声人語『電子ブック版朝日新聞天声人語・社説1985-1991』

<引用・参考辞書>

『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) 辞書編』(1990) (情報処理振興事業協会)

『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) 解説編』(1990) (情報処理振興事業協会)

『学研現代新国語辞典』金田一春彦編 (1994)

<引用・参考文献>

橋本三奈子、青山文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法：終止、連体、連用」(『計量国語学』18-5)

宮島達夫 (1992) 「調査報告 形容詞の語形と用法」(『計量国語学』19-2)